

【資料紹介】『科学遊具と自作』 — 建築家中村與資平と児童科学教育会の活動について

鳥越千尋*

目次

はじめに

- 1 『科学遊具と自作』内容紹介
- 2 出版の予定と実際
- 3 中村與資平と児童科学教育会
- 4 児童科学教育会の活動内容
- 5 同時代における『科学遊具と自作』シリーズの評価

おわりに

キーワード 科学遊具と自作 児童科学教育会 中村與資平 大正自由教育
理科教育 科学読物 児童書 成城小学校 カイザーパノラマ

はじめに

中村與資平は、1880年（明治13）に静岡県長上郡天王村（現在の浜松市中央区天王町）に生まれ、1905年（明治38）東京帝国大学建築学科を卒業後、朝鮮半島や中国東北地方、国内では東京や浜松を中心に活動し、銀行・医療機関や、学校や公会堂などの公共建築を多く手がけた建築家である。中村與資平の経歴や建築活動については、既往の研究によってかなり詳細に明らかになっているが¹⁾、ここではそのうち国内で中村が行った教育活動について注目したい。

西澤泰彦²⁾は、中村與資平の日本近代建築史上の功績のひとつとして、中村が建築教育に貢献したことを挙げており、その具体的な活動の内容として、西洋古典建築を解説したチェンバースの著作を訳し『美術的建築』³⁾として出版したこと、実践女子専門学校での住居に関する講義とその内容をまとめ『住居』⁴⁾として出版したこと、日本大学で都市計画や建築一般の講義を行ったことなどをあげている。加えて、中村與資平の「自伝」⁵⁾をみると、彼の教育活動への関心は建築分野だけではなく、科学教育にもあったことが読み取れる。あるいは『住居』序文にも、中村が欧米旅行の帰国後に日本で「児童科学教育会」という名称の団体を組織し、科学教育の普及を試みたことが記されているが、今までその

*東京都江戸東京博物館司書

活動の具体的な時期や内容については明らかにされていなかった。

今回、江戸東京博物館で所蔵している図書資料である『科学遊具と自作』シリーズを調査したところ、発行元となっている「児童科学教育会」が、この中村與資平の設立した団体であることが新たに明らかとなった。本稿では、この『科学遊具と自作』の紹介と、中村與資平の科学普及に関する活動および児童科学教育会の活動の詳細について述べる。

1 『科学遊具と自作』 内容紹介

シリーズ各巻のタイトル・編集者名・発行年月日などの、主な書誌事項の一覧を【表1】にまとめた。なお所蔵している各巻の表紙写真一覧は次ページ以降に掲載したので適宜参照されたい【参考図版】。同シリーズは、洋装四六判の図書資料であり、第1巻『電動機』は1923年（大正12）3月に発行、その後確認する限り第19巻まで刊行され、以降は出版されていない。そのうち当館では、【表1】に示すとおり12冊を所蔵している（89206975～89206981、91600214～91600218）。なお第10・18・19巻の3冊は、現在所蔵登録にむけ準備中である。

【表1】『科学遊具と自作』一覧

	巻	タイトル	責任表示	発行年月日	ページ数	定価	所蔵
第1期	1	電動機	清水隆/編集兼発行	1923年 3月15日	78p	50銭	
	2	電気呼び鈴	清水隆/編集兼発行	4月15日	74p	50銭	○89206975
	3	伸縮図機と魔法扇	清水隆/編集兼発行	5月18日	61p	50銭	
	4	實物幻燈機	清水隆/編集兼発行	6月23日	67p	50銭	○89206976
	5	ケーブルカー	清水隆/編集兼発行	7月20日	128p	65銭	○89206977
	6	単葉飛行機	清水隆/編集兼発行	8月15日	117p	60銭	○89206978
	7	寫真機	清水隆/編集兼発行	1924年 1月15日	105p	60銭	※
	8	光線信号機	清水隆/編集兼発行	3月 2日	180p	50銭	○89206979
	9	電信機	清水隆/編集兼発行	3月29日	101p	50銭	○89206980
	10	印刷機	清水隆/編集兼発行	4月27日	72p	50銭	登録準備中
	11	臺秤器と魔法使	近藤和作/編集兼発行	5月29日	77p	50銭	○89206981
	12	蒸気タービン	近藤和作/編集兼発行	7月14日	70p	50銭	
第2期	13	電池の作り方	清水隆/著, 近藤和作/発行	8月14日	84p	70銭	○91600214
	14	望遠鏡の作り方	清水隆/著, 近藤和作/発行	11月 2日	72p	70銭	○91600215
	15	蓄音機の作り方	近藤和作/編集兼発行	12月25日	63p	70銭	○91600217
	16	活動寫真機の作り方	近藤和作/編集兼発行	1925年 2月28日	60p	70銭	○91600218
	17	インダクションコイルと無線電信	近藤和作/編集兼発行	4月25日	74p	70銭	○91600216
	18	変圧器と有線電話の作り方	近藤和作/著者兼発行	7月21日	68p	75銭	登録準備中
	19	ラジオの組立法	川野義雄/著, 近藤和作/発行	7月21日	76p	80銭	登録準備中

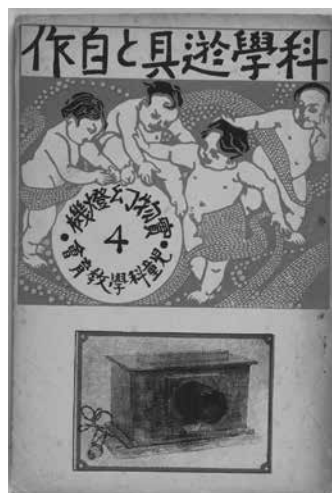
※国立科学博物館所蔵

シリーズには明確に、第1期（第1巻～第12巻）と第2期（第13巻～第19巻）の区別が存在する。それぞれで装丁が異なり、第1期表紙は無彩色の紙の地にエンジェルを思わせる幼児のイラストが印象的なもの、第2期は暗めの赤の表紙にタイトルと各巻で取り扱っている製作物あるいはそのイメージ図のみというシンプルなものになっている。シリーズを通し、編集者や発行者の変遷はあるが、発行社は

【参考図版】表紙写真一覧



第2巻『電気呼び鈴』表紙
(89206975)



第4巻『実物幻燈機』表紙
(89206976)



第5巻『ケーブルカー』
表紙 (89206977)



第6巻『単葉飛行機』表紙
(89206978)



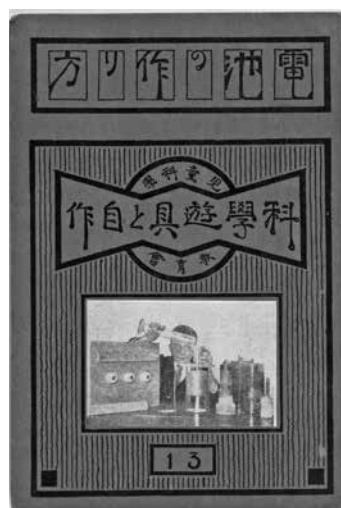
第8巻『光線信号機』表紙
(89206979)



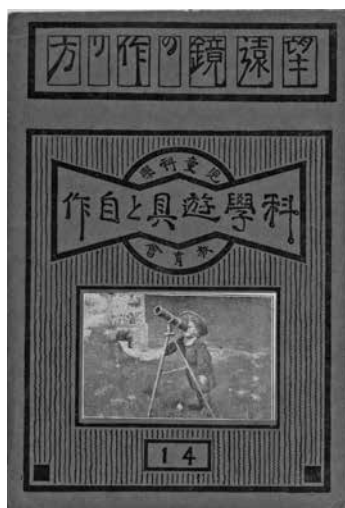
第9巻『電信機』表紙
(89206980)



第11巻『臺秤器と魔法使』表紙
(89206981)



第13巻『電池の作り方』表紙
(91600214)



第14巻『望遠鏡の作り方』表紙
(91600215)



第15巻『蓄音機の作り方』表紙
(91600217)



第16巻『活動寫真機の作り方』
表紙 (91600218)



第17巻『インダクションコイルと
無線電信』表紙 (91600216)

すべて児童科学教育会である。各巻の奥付記載の発行所住所は「東京市本郷区西片町一番地」となっており、ここは当時東京市における最初の3階建校舎として建てられていた本郷高等小学校の目の前にあたる（現在の文京区立第六中学校の前）^{6) 7)}。この場所はまた東京帝国大学のすぐ近くでもあり、当時の西片は学者や官吏の居住者の多い地区であった⁸⁾。

各巻定価については、第1期が1冊50銭（一部60銭または65銭）、第2期は概ね70銭となっている⁹⁾。ただし、児童科学教育会へ入会し会費を支払うことで、冊子の増に関わらず毎号を送付するとしており、第1期は1年分（12冊）の購読申込料として5円、半年分だと2円80銭、第2期は1年分が6円、半年分が3円40銭¹⁰⁾と設定されている¹¹⁾。

『科学遊具と自作』シリーズは、児童や生徒が自分で実際に手を動かすことによって、工学的知識と技能を習得させることを目的に出版された、子ども向けの科学読み物といえる。シリーズ中の多くの巻が物語風に書かれており、読者である子どもが、より共感し興味を持つように意識したものと思われる。例をあげると第1巻『電動機』では、小学校高学年である「國男」が従兄で中学生の「米雄」から、『科学遊具と自作』の本のことを聞き、教わりながら電動機を作成するというストーリーで、鍛冶屋や轆轤屋などで材料を揃え、実際に手を動かし製作していく過程が記述されている。シリーズを通して同様の構成のものが多く、一方で別のパターンもあり、例えば第8巻『光線信号機』では大人から子どもへ語りかけるように説明する形式であり、あるいは第13巻『電池の作り方』は、難しい用語を避けつつも、内容はフラットな説明文で語られ、文体もカタカナ書きで、教科書の副読本のような印象をうける。このようにシリーズの中で巻によって大きく差が見られ、一貫性があるとはいいがたい。こうした違いの理由は、現時点で明確にわかっていない。

また、メインとなる工作に関わる本文のほかに、第5巻『ケーブルカー』から「児童大学」¹²⁾という欄を設け、子ども向けの科学知識の読み物を掲載している。記事一覧は以下のとおりである。

- ・「夏の海邊」[作者不明]（第5巻『ケーブルカー』）
- ・「鹽の話」小栗捨藏（第5巻『ケーブルカー』）
- ・「鰻の話」内田亨（第6巻『単葉飛行機』）
- ・「海邊と山間の空気」内田亨（第6巻『単葉飛行機』）
- ・「食鹽の話（続）」小栗捨藏（第6巻『単葉飛行機』）
- ・「埃の必要（上）」小栗捨藏（第7巻『寫真機』）
- ・「圧搾空気の話（上）」清水隆（第7巻『寫真機』）
- ・「埃の必要（下）」小栗捨藏（第8巻『光線信号機』）
- ・「圧搾空気の話（中）」清水隆（第8巻『光線信号機』）
- ・「電信と電話」HG生（第9巻『電信機』）
- ・「電報物語」南稲作（第9巻『電信機』）
- ・「圧搾空気の話（下）」清水隆（第9巻『電信機』）
- ・「砂糖の話（上）」小栗捨藏（第10巻『印刷機』）

- ・「実用臺秤の構造」HG生（第11巻『臺秤器と魔法使』）
- ・「度量衡の歴史と「メートル」法の統一」HG生（第11巻『臺秤器と魔法使』）

執筆者¹³⁾には帝国大学出身者の名前もあり、子ども向けといつつ、内容は大人が十分読めるものになっている。トピックは工学分野にとらわれず生物・化学・物理など幅広く扱い、収録巻の内容に沿う形で選ばれているものもある。また今でいう「自由研究」向きのものや時事的なものを選んで様子もうかがえる。

シリーズの第3巻以降にはすべて振り仮名がふられており¹⁴⁾、また各巻に製作のための図面と材料価格表が、掲載あるいは付属している。児童科学教育会には編集部のほか材料部が存在し、希望があればそこから組み立てに必要な材料や工具類を購入することができた。製作図面の寸法表記は、シリーズのはじめは尺貫法で記載されているが、途中からメートル法¹⁵⁾に変わっている。第9巻『電信機』投書欄には、読者からのメートル法表記の要望が掲載されており、それに対しすぐに改良すると述べた上で、最初からメートル法を採用しなかった理由について、まだメートル尺を持っている人が少ないと思われることと、大工や金物屋に寸法指定する場合に困ること、の2つを挙げていて、移行期の受容の様相がうかがえて興味深い。

第16巻『活動写真機の作り方』に掲載されている「第二期会員申込案内」には、「十分な耐久力のある紙質」「振りかな付き」「使用漢字は文部省漢字制限の範囲」「製作図と多数の挿絵」と挙げられており、前述した特徴について、少なくとも第2期では明確に、児童・生徒向けの図書として意図してそうしていたことが読み取れる。

当時の子ども向け読み物の出版状況について、『科学遊具と自作』第1巻の序文「父兄の方々へ」には、「近時児童の課外読物の必要が漸く各人に留意せられ、是に関する数多の図書雑誌の陸続と出版されるに至ったのは喜ばしい次第であります」と書かれているが、その上で「文藝的読物としての童話類は悄悄進歩した傾がありますが、その他の種類属するものは遺憾ながら未だそのよきものの出現を見ないのであります」¹⁶⁾として、現状不十分である認識だと述べている¹⁷⁾。

『科学遊具と自作』が発行された1923年（大正12）前後は、いわゆる大正デモクラシーと呼ばれる時代の末、とりわけ大正自由教育の気運が大きく高まっていた時期にあたる。それまでの絶対主義・官僚主義の形式的な教育に対して、自由主義・児童中心主義の新教育が提唱され、成城小学校をはじめとする私立の新学校設立、師範学校の附属小学校や公立小学校など公教育での実験教育、綴り方や自由画教育の拡がり全国各地で見られた¹⁸⁾。この時代を代表する雑誌として、鈴木三重吉の主宰する月刊誌『赤い鳥』（1918年創刊）が有名だが、それに追従する形で類似雑誌がいくつも登場している¹⁹⁾。『科学遊具と自作』序文で触れられている「童話類」とはこうした一群を指すのだろう。

またこの頃は、第一次世界大戦を契機とする科学振興に影響されて、子ども向けの科学読み物の出版ブームの時代でもあり²⁰⁾、初の子どもの向け科学雑誌をうたう『理化少年』（1918年創刊）²¹⁾、原田三夫『子供の聞きたがる話』（1920年～）、井田静夫『少年理科叢書』（1921年～）など次々と出版されている状況だった。

こうした子ども向けの科学読み物について、『科学遊具と自作』序文には「科学に関する児童読物は少ないながらも出版されておりますが、皆単に読物としての出版であります」と書かれており、より実際的な知識を身につけるには不十分だとの見方を示している²²⁾。

2 出版の予定と実際

『科学遊具と自作』シリーズは当初予定されていた内容・出版時期と、実際に刊行されたものと大きく差がみられる【表2】【表3】。なおこれら2つの表は『科学遊具と自作』に載っていた広告欄等から作成した²³⁾。

まず第1期の刊行年月日について、予定では毎月15日発行としていたようで、当初は多少遅れる場合があり

つつも概ね予定通りに刊行していたようだが、第7巻『寫眞機』²⁴⁾には明らかに大幅な発行の遅れがみられる。これは1923年（大正12）9月1日に発生した関東大震災の影響と考えられ、同書「編集室より」には、「震災後各印刷所の忙しさと申しましたなら、ちょうど戦争のやうとでも申しませうか、それはそれは大変なものです。震災前の何分の一かに減少しました印刷能力で震災前に倍加した印刷をする状態でありますから」と記されており、当時の出版の混乱状況が具体的にうかんでくる。

発行所のあった西片周辺は、東京帝国大学の一部で火災があったものの²⁵⁾、大部分は焼失をまぬかれた地区であった。発行所のあった建物付近も、東京市内の他の地域と比較すると、建物の損壊・火災などの直接的な被害はないか軽微ですんだものと考えられる^{26) 27)}。

一方本誌にも記載があるように、東京の印刷工場には甚大な被害がでており、印刷組合の工場685のうち552が灰燼に帰し、14が倒壊、生産能力の83%が壊滅状態だったという²⁸⁾。震災前後、『科学遊具と自作』の印刷は市谷にある秀英舎第一工場²⁹⁾で行っていた。この地区は火災もなく、第一工場では改築工事中の鉄筋コンクリート3階建の3階部分が倒壊したものの、活版印刷機械はほとんど無事であり、9月

【表2】第1期予定刊行月と実際

	巻	刊行予定タイトル	刊行予定月	実際の刊行年月日
第1期	1	電動機	1923年 3月	1923年 3月15日
	2	電気呼び鈴	4月	4月15日
	3	伸縮函機と魔法扇	5月	5月18日
	4	實物幻燈機	6月	6月23日
	5	ケーブルカー	7月	7月20日
	6	単葉飛行機	8月	8月15日
	7	写真機	9月	1924年 1月15日
	8	光線信号機	10月	3月 2日
	9	電信機	11月	3月29日
	10	印刷機	12月	4月27日
	11	臺秤器と魔法使	1924年 1月	5月29日
	12	蒸気タービン	2月	7月14日

【表3】第2期予定タイトルと実際

	巻	刊行予定タイトル	実際のタイトル
第2期	13	電池の作り方	電池の作り方
	14	インダクションコイルの作り方	望遠鏡の作り方
	15	望遠鏡の作り方	蓄音機の作り方
	16	無線電信機の作り方	活動寫眞機の作り方
	17	変圧器の作り方	インダクションコイルと無線電信
	18	文化住宅の作り方	変圧器と有線電話の作り方
	19	人形芝居の作り方	ラジオの組立法
	20	黒カメラの作り方	
	21	凧と軽気球の作り方	
	22	水力タービンの作り方	
	23	日時計の作り方	
	24	発電機の作り方	

14日から一般営業を再開している。多くの新聞社や印刷業者が被災し活字を失ったため、大量印刷能力を有する数少ない工場として、新聞社や官庁からの、あるいは定期刊行物の注文がここに殺到する状況になっていた³⁰⁾。多くの雑誌が休刊・廃刊を余儀なくされたのと同様に、『科学遊具と自作』にも影響がみられ、刊行の遅れや材料の提供がスムーズにできないことを詫げる文章が本誌に書かれている。

次に【表3】をみると、第2期の内容について刊行の途中で大きく変更があったことがわかる。その理由について、第15巻『蓄音機の作り方』編集室だよりには、「人形芝居や文化住宅の如き苦心惨憺して折角出来上がったものが非科学的で、さ程に面白くないから外のものに替えて出してくれとの御希望の手紙が非常にたくさん有りましたので」編集部でも検討し変更することにした、との経緯が書かれている。この「非科学的」なラインナップについて、『科学遊具と自作』がすでに述べたように、児童に工学的な知識を身につけさせることを目的に作られた図書であるにも関わらず、なぜこのような内容を最初に刊行予定としたのだろうか。

その理由については3章で後述するが、ここではシリーズ途中で編集者が清水隆から近藤和作へ代わっている点を指摘しておく。『科学遊具と自作』発行にあたり名前の登場する、中村興資平・清水隆・近藤和作の3名の役割分担の正確なところは不明であるが、主に第1期の編集者として名前の記されている清水隆については、『新しい科学玩具の作り方』³¹⁾という書籍を1931年（昭和6）に出版しており、その内容には「矢鉄砲」「水鉄砲と吸揚ポンプ」などのほか、『科学遊具と自作』シリーズにもある「秤」「電気モーター」、そして実際には刊行しなかった「赤い屋根の文化住宅」が扱われている。おそらく『科学遊具と自作』内容の執筆は、当初は清水が行っていたが、内容の変更に伴い編集者が変更になったものと考えられる。

3 中村興資平と児童科学教育会

本章では、中村興資平が児童科学教育会を作り、『科学遊具と自作』発行に至った動機について、主に「自伝」を参考にみていきたい。

中村家は慶長年間から代々天王村（現浜松市中央区天王町）の庄屋を務めた豪農であり、興資平は広大な屋敷の中、裕福な家庭環境のもとで生まれ育っている。1905年（明治38）に東京帝国大学建築学科を卒業した後は、大学院に籍を置いたまま、京橋区日吉町にある辰野・葛西事務所に就職、そこで第一銀行韓国総支店の設計を担当することになる。中村はその現場監理として1907年（明治40）に北京を訪れ、その後1912年（明治45）1月に同銀行は竣工、同じ年に京城に建築の設計・監理をする建築事務所をひらく。この京城の事務所では、のちにフェラーやリークというドイツ人技師³²⁾を雇用するが、「自伝」では彼らと接するなかで「独逸の教育方法の我国とは余程異なる事を感じ、是非それを研究してみたいと思うに至った」とあり、ドイツの教育について興味を持った最初のきっかけが彼ら、中でもとくにフェラーとの交流にあったことが読みとれる³³⁾。その後、1920年（大正9）12月に京城の事務所が失火により全焼したのをきっかけに、中村は1922年（大正11）4月に東京に事務所を構え活動拠点を移転することになるが、その前年の1921年3月から1922年2月までの約1年間、フェラーを伴い欧米へ視察旅行に

出かけている³⁴⁾。

中村興資平はこの旅行の記録を、『米欧旅行記』としてのちにまとめている³⁵⁾。アメリカ、ドイツ、スペインなどを含む17ヶ国³⁶⁾と広域にわたる世界旅行であり、道中は鉄道のほか車を使用したり、ロンドンからパリへは当時は海外でもまだ珍しかった旅客機³⁷⁾に乗ったりと、「費用におかまいなく元気にまかせ」旅行するのだが、なかでもドイツでのことは自伝で特に取り上げている。

ドイツでは、建築視察のほか教育の視察のために、小学から大学まで各学校を見学している。またフランクフルトでは、詳細は不明だが「子供の展覧会」を訪れ、子どもたちが将来の夢として、日本のように官僚や軍人ではなく、機械工業を多く希望しているのを見て「子供に至るまで機械工業に興味を持ち将来科学をもって世にたたんとする、この着実な心持ち、これが独逸の底力あるゆえんだ」と自伝に記している。また、そうした国民を育てるためには、適した科学教育が不可欠であり、その具体的な取り組みとして、「スピール・ウント・アルバイト（遊戯と製作）」形式による児童の科学知識の会得、カイザーパノラマを用いて世界の名所などの様子を一般の国民に見せること、科学博物館の設置、一般向けの科学講習会の開催、学者が選定した「国民図書」の各工場村落等への設置、商品見本展覧会の開催による商品の進歩改良の促進、などを挙げている。

そしてドイツで一般的に入手可能な書籍を参考に「この種の日本的なものを新たに作り、子供にも科学に興味を持たせることが国家の急務である」³⁸⁾として、ドイツから「カイザーパノラマ2台、国民図書一揃え、スピール・ウント・アルバイトのシリーズ全部」を日本に持ち帰り、後藤新平、鎌田栄吉、渋沢栄一、沢柳政太郎などの名だたる人物を賛助員³⁹⁾とし、自費を投じて児童科学教育会の設立に至っている。

この「スピール・ウント・アルバイトのシリーズ」が、『科学遊具と自作』制作の際の参考書にあたるものであることが想像できるが、中村興資平がドイツより持ち帰ったその現物は今のところ見つかっておらず、失われた可能性が高い。

「スピール・ウント・アルバイト」の名称については、1924年（大正13）に発行された『理工玩具の研究』にも言及されており、「獨逸で児童の最も多く愛読される『スピール・ウント・アルバイト』即ち遊戯と仕事と云う書物には、高尚な理化学の知識を子供に理解させるため、に理科玩具や遊戯によりて極めて平易に面白く会得さすやうに説明してある」⁴⁰⁾と学習参考書として紹介されている。

これは、1900年（明治33）からドイツで発行されていた『Spiel und Arbeit』シリーズを指すとみて間違いないだろう。中村が旅行時に現地で入手したことをふまえ、1922年（大正11）までに発行されたもので見ると64冊⁴¹⁾あった。そのラインナップを一部列挙すると、電話、顕微鏡、パドルカヌー、電気モーター、蒸気タービン、ドールハウス、人形芝居、ケーブルカー、天文装置、スキー、風力タービンとモーター、水車、電信装置、日時計、スライド、マジックランタン、キネマトグラフ、太陽撮影機、電灯、電気ベル、カメラオブスキュラ、アキュムレーター、電流測定装置、路面電車、パントグラフ、変圧器などがあり、この中に『科学遊具と自作』シリーズの刊行内容と第2期予定内容が、ほぼ含まれていることがわかる。したがって、基本的にはこれを参考に『科学遊具と自作』は考案され、日本の子ども向けにするために、文章内容の執筆と製作図の作成を行い出版したものと考えられる。

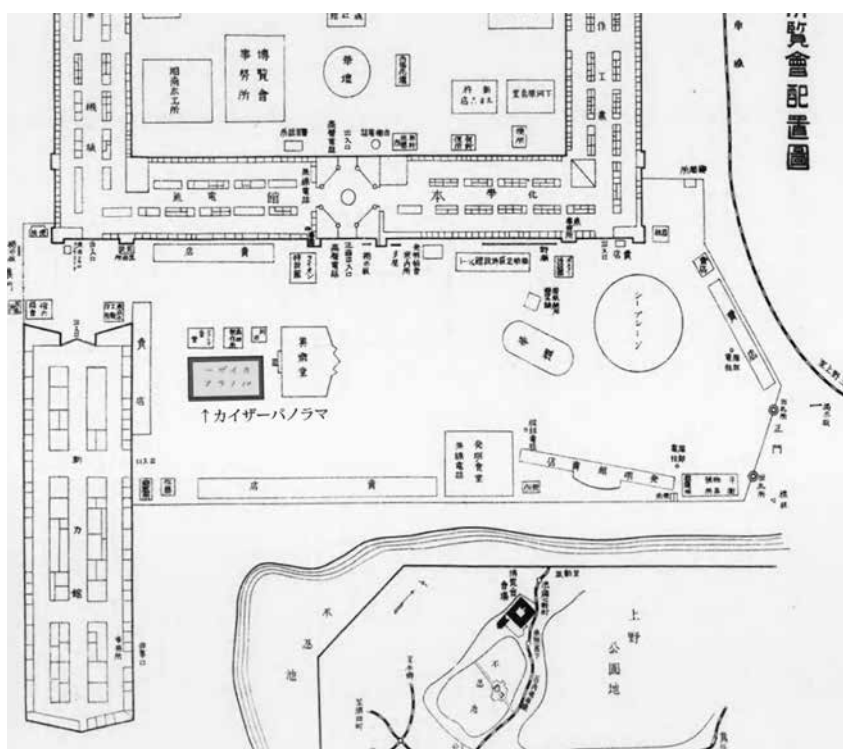
4 児童科学教育会の活動内容

最初に児童科学教育会の活動がうかがえるのが、1922年（大正11）6月26日読売新聞朝刊の「日本へ初耳のカイゼルパノラマがくる」⁴²⁾という記事になる。内容は、朝鮮銀行顧問で建築家の中村與資平が、日本の代理権を獲得し、後述するドイツのカイザーパノラマを持ち帰ってくるというもので、渋沢や一木博士も賛同し後援すると言った内容に続けて、「中村氏は吉野作造、杉森早大、永井柳太郎、中野正剛、榊本卯平等と共に会合して日本をして科学的の立場から根本的に改造したいという」ので、その発起人会開催の予定だとある。ここではまだ会の名称は定まっていない。

その半年後の1923年（大正12）1月、児童科学教育会を起し準備中だという内容の記事⁴³⁾には、会の発起人について「本郷西片町工学士近藤和作、同中村與資平、早稲田大学講師清水隆の三氏」と書かれており、ここに中村のほか『科学遊具と自作』の編集者である2人の名前を見て取れる。記事によると児童科学教育会の目的は、「世界パノラマを取寄せ、活動写真の傍ら科学知識普及の小冊子を毎月頒布する」ことであり、その小冊子すなわち『科学遊具と自作』の発行については「児童をして玩具を造らしめ学校で習得する科学知識を実際に応用せしむるため」としている。

そして、この記事から2ヶ月後の1923年3月10日から14日の5日間、お茶の水の東京博物館（現在の国立科学博物館）で「カイザー世界パノラマの試演」を行っており⁴⁴⁾、その後同月に不忍池北畔で行われた第3回発明品博覧会に出品している。

この発明品博覧会は帝国発明協会の主催で行われたもので、いわば民間による見本市的な性格の博覧



【図版1】 第三回発明品博覧会配置図 抜粋
 (『発明品博覧会報告』第3回(第三回発明品博覧会, 1924)より転載)

会である。出品等の詳しい内容は翌年7月に発行された『発明品博覧会報告』⁴⁵⁾に書かれているが、同書の「第三回発明品博覧会配置図」【図版1】をみると、中央付近、奏楽堂の前に「カイザーパノラマ」の文字が確認でき、また口絵には外観写真の掲載も見られる【図版2】。

同博覧会は3月20日から5月18日までの60日間にかけて行われ、日本産業協会所有の産業館⁴⁶⁾のほか、平和記念東京博覧会の電気館と新設した陳列館2棟、奏楽堂とその他特



【図版2】カイザーパノラマ館外観写真
（『発明品博覧会報告』第3回より転載）

設館を会場とした。この特設館のうちのひとつにカイザーパノラマ館があり、32坪の土地に仮設の施設を建て、大人20銭小人10銭で供していた。カイザーパノラマについては、中村與資平が日本で初めてドイツから二台輸入したもので、「一台に付同時に二十五人の観覧者が各自周囲に並べる実体双眼鏡より覗けば五十枚の写真は其説明書と共に自動的に逐次回転して観る人の現はれ座ながら欧州各地の風景を観るを得せしめたり」⁴⁷⁾とある。

カイザーパノラマとは、円柱状の装置の外側からレンズのついた穴を覗いて、回転台に載った1シリーズ50枚からなる絵を順繰りに見ていく、大型のステレオビューワーのような装置で、アウグスト・フーアマンによって発明され、1880年（明治13）にプレスラウで公開、その後ドイツ全土に250近くに及ぶ配給網があったという⁴⁸⁾。ヴァルター・ベンヤミンは「ベルリンの幼年時代」の中で「皇帝パノラマ館」にふれており、1900年代にはすでに流行おくれとなっていたが「その魅力はなにひとつ失われていなかったし、子どもたちこそ最後の観客だったのだ」⁴⁹⁾という書き方をしている。これは多分に懐古的な、郷愁を含んだ文章であるとは思われるが、同じような景色を中村もドイツで見たのかもしれない。

展覧会としてはそのほかに、1923年（大正12）5、6月に東京博物館で開催された文部省主催の「動力利用展覧会」⁵⁰⁾に参加している。児童科学教育会の出品は「『科学遊具と自作』冊子、ドイツ原著の「遊戯と仕事」並に製作見本」と記されており、会場では、東京高等師範学校附属小学校が出品した児童の製作物、具体的には機関車や潜水艇、モーターなどの工作設計図や、風車、モーター潜水艇、水力タービン模型などの近くに展示された⁵¹⁾。

また児童科学教育会では科学講演会も一事業として位置付けており、実際に「遊具と科学講演会」と題して開催している⁵²⁾。その第1回は6月30日に愛日尋常高等小学校にて、第2回は7月21日に東京丸ノ内商工奨励館講堂にて開催された。中村與資平は会の理事という立場で、第1回「現在の獨逸と科学教育」、第2回「児童科学の業務」と講演している。聴衆は市内各小学校の理科教師が多かったようである⁵³⁾。

5 同時代における『科学遊具と自作』シリーズの評価

『科学遊具と自作』が出版された当時、この本はどのように受け入れられ、評価されただろうか。児童科学教育会が意図していた購買層は、特に新教育を実践している小学校に通うような、ある程度の経済力があり教育熱心な家庭の児童（実際にはその父母）であったと考えられる。しかし『科学遊具と自作』の内容を見ると、はたして小学校高学年が読んで本当に自力で作れる難易度かはやや疑問がのこる。また、『テーブルカー』内の記述では、さまざまよせられる要望に対し「いろんな読者がいるので」という表現があり、実際の購入者の年齢幅はもう少し広がった可能性もある。

『科学遊具と自作』は1923年（大正12）4月に通俗図書認定をうけており⁵⁴⁾、文部省編纂『図書館書籍標準目録』⁵⁵⁾にも掲載され、多くの図書館で購入や寄贈により所蔵された形跡がみられる。また、『毎日年鑑』⁵⁶⁾各種団体の「児童科学教育会」の欄をみると、会員数6万5千人と書かれている。単に学会員という場合と書籍目当ての人との両方が含まれた数だろうが、裏を返すとこれに近い数⁵⁷⁾の発行部数があったといえるだろう。『赤い鳥』の最盛期が1922年（大正11）前後で発行部数は2～3万程度、講談社『少年倶楽部』が同時期8万の発行部数があったという⁵⁸⁾のと比較しても、『科学遊具と自作』あるいは児童科学教育会に対する人々の関心の高さがうかがえる。

また教育関係者の執筆したいくつかの著作や小論の中で、『科学遊具と自作』についての言及が見られ、例えば吉野作造が『中央公論』⁵⁹⁾で、医学者の佐谷有吉が『最新家庭医学小児科及優生学』⁶⁰⁾で児童に与えるべき本として具体的に名前をあげている。

そのほか『理科教育』に掲載された小論「理科と手工科との連絡について」⁶¹⁾にも、学習のための参考書として名前があがっている。1926年（大正15）に小学校令の一部改正によって、高等小学校において手工科が必修教科目となっており、多くの教員にとって関心の高い話題だったと考えられる。

一方子どもの視点で見ると、「電気呼び鈴」や「電力機」を本の通り作ったがうまくできなかったという記述⁶²⁾があるほか、吉野俊造氏は『中央公論』誌面で、小学校のときに父親から『科学遊具と自作』をもらったことにふれているが、「幻燈機と巻上げ機のほか、作った記憶はない。だが、読んでいだけで、頭のなかで物が出来ていくので、とても楽しいものだった」⁶³⁾と述べている。

最後に『科学遊具と自作』と成城小学校との関わりを指摘しておきたい。

第1巻『電動機』口絵には「成城小学校に於ける電動機製作実況」という写真があり、そこには製作する様子の3人の児童と、それを背後から見守る「本会清水幹事」と「谷理科主任」の2人が写っている。アメリカのヘレン・パーカーストが創始したダルトン・プランが成城小学校で研究され始めたのは1922年（大正11）から⁶⁴⁾であるが、そこでダルトン式の理科実地授業を実際に行っていたのがこの谷騰である⁶⁵⁾。

そのほか、児童科学教育会の編集部住所が第2期から「東京市牛込区原町成城小学校内」となっていることや、会長名として澤柳政太郎の名前が記載されている場合があることなど、単に大正自由教育という思想的なつながり以上の関わりがある様子がうかがえるが、現段階では断片的な情報にとどまっております。今後の調査課題としたい。

おわりに

本稿では『科学遊具と自作』の紹介と、発行元の児童科学教育会とその発起人である中村與資平の行った科学教育活動について述べてきた。『科学遊具と自作』は、数多くある子ども向け科学読み物の中でも、詳細な図面付きで、より実的な技能習得を志向したものという意味で新しく、第一次世界大戦後、関東大震災前後の大正という時代をうつす恰好の資料といえる。

第19巻『ラジオの組立法』には、次のシリーズとして化学編を予定中⁶⁶⁾と書かれているが、おそらく実現しておらず、この巻を最後に『科学遊具と自作』の刊行だけでなく、表だった児童科学教育会の活動も途絶えているようにみえる。中村は自伝でその理由について「時期尚早なりしと自分が片手間でかかる大事を企たると自分の実業家たる資質を有せざる等により」とのみ記している。だが震災やその後の不況の影響、また何より大正自由教育運動の全国的な衰退と密接な関係があったとみてよいだろう。

なお中村與資平については、1956年（昭和31）に静岡県教育委員会の副委員長となっており、そのときの当選記事でもドイツ流の科学教育について語っている⁶⁷⁾。大正期には結果挫折するような形になったものの、晩年までその志を失わず日本の科学教育に寄与したいという思いがあったことが感じられる。今回調査の及ばなかった、大正自由教育なかでも特に成城小学校との関わりや、手工科をはじめとする日本の技術教育の流れの中で見たときの本資料の捉え方などについて、引き続きの調査課題としたい。

【註】

- 1) 例えば、浜松市立中央図書館/編『浜松が生んだ名建築家中村與資平展』（浜松市立中央図書館, 1988）。西澤泰彦「建築家中村與資平の経歴と建築活動について」『日本建築学会計画系論文報告集』第450号（日本建築学会, 1993・8）, pp.151-160。西澤泰彦「続・生き続ける建築—9 中村與資平」『INAX REPORT』No.187（INAX, 2011）, pp.4-14。土屋和男「韓国における中村與資平の建築」『常葉大学造形学部紀要』第19号（常葉大学造形学部, 2021）, pp.71-75。
- 2) 西澤泰彦「建築家中村與資平の経歴と建築活動について」『日本建築学会計画系論文報告集』第450号（日本建築学会, 1993・8）, pp.151-160。
- 3) 中村與資平『美術的建築』（東京書院, 1917）。原著は、W.H.リーズ編『A Treatise on the Decorative Part of Civil Architecture』（辰野金吾による同書「序文」より）であり、チェンバースが1759年に著した「一般建築論」を改題し「一般建築意匠論」として再版した1791年版を、ギルトが1825年に再版、その後さらに1862年にリーズ編集で再版されたもの（フランク・ジェンキンス、佐藤彰・五島利平衛/訳『建築家とパトロン 16世紀から現代までの建築家の職能と実務の史的研究』（鹿島出版会, 1977）, p.115.）。なお、中村與資平の出版した『美術的建築』は、関東大震災後の1930年（昭和5）に『洋風建築設計者の虎の巻』と改題し、武田五一の執筆した「序」を加え、鈴木書院より再版している。
- 4) 中村與資平『住居』（櫻文書院, 1937）。
- 5) 中村與資平「自伝」（浜松市立中央図書館蔵）。自伝の内容は前掲1）『浜松が生んだ名建築家中村與資平展』に収録されており、同書によると「自伝」の書かれた正確な時期は不明だが、昭和20年代のはじめにまとめられたものと思われる。なお、同図書館が所蔵する「中村與資平コレクション」は「浜松市立中央図書館/浜松市文化遺産デジタルアーカイブ」で一部公開されており、中村の「自伝」や「営業経歴」ほか、建築図面や関連する写真集などのインターネット閲覧が可能である。<https://adeac.jp/hamamatsu-city/top/>（参照 2023-10-20）。
- 6) 東京都文京区教育委員会/編『文京区教育史 学制百年の歩み』（東京都文京区教育委員会, 1983）, p.269, 844。
- 7) 人文社編集部/企画・編集『明治大正東京散歩 古地図・現代図で歩く 古地図ライブラリー別冊』（人文社, 2003）, pp.84-85。

- 8) 文京区役所/編『文京区史』4 (文京区, 1981), p.29.
- 9) 本体価格のみ。別途、郵税として4銭がかかる。
- 10) 近藤和作/編『活動寫真機の作り方』科学遊具と自作16 (児童科学教育会, 1925), 「会員申込案内」。
- 11) 比較のため当時の本や雑誌の価格をあげておくと、1923年の『中央公論』(中央公論社)、『思想』(岩波書店, 1921年創刊当時)や『文学』(1929年創刊当時)などが80銭(甲賀忠一, 制作部委員会/編『物価の文化史事典 明治・大正・昭和・平成』(展望社, 2008), p.323.)、『赤い鳥』(赤い鳥社, 1923・9)や『理化少年』(日本少年理化学会, 1922・7)は定価30銭、鈴木三重吉編『世界童話集』(春陽堂)が1冊85銭。
- 12) アメリカのヘレン・パーカーストが創始した「ダルトン・プラン」の日本への紹介として、E・デューイ『The Dalton Laboratory Plan, 1922』を、赤井米吉が同1922年(大正11)に『児童大学の実際』として翻訳出版している。なおより正確にいうと、パーカーストは彼女の「実験室案」を実施する場所とした一私立小学校のことを「児童大学」と名付けている(中野光『大正自由教育の研究』(黎明書房, 1968), pp.191-193. 小原國芳『自由教育論 附児童大學と成城の教育』教育問題叢書1 (アイデア書院, 1924), p.86-87.)。ダルトン・プランについては、第1巻『電動機』序章でも言及されていることから、「児童大学」のネーミングはここから着想を得たものと推測できる。
- 13) 内田亨(1897-1981)は、静岡県浜松市出身、1923年(大正12)に東京帝国大学理学部動物学科を卒業。随筆を含め多くの著作があるが、本誌に関連するところでは、同時代の『赤い鳥』や『科学画報』に執筆がみられる。小栗捨蔵(1886-1960)は、早稲田大学教授(昭和4年時点)、工学士。『科学遊具と自作』執筆以前の著作に『通俗提要 現代の化学工業』(丸善, 1919)などがある。
- 14) 第1巻には振り仮名はなく、第2巻では「特別な字とか少しむつかしいと思はれる字だけ」に限定してふられている。慶応義塾大学幼稚舎に勤務し、綴方教育の研究と実践につくした菊池知勇(1889-1972)の『児童文章学』には、『科学遊具と自作』第1巻と第2巻を読んだ児童の、振り仮名がなく読みにくいことを批判する内容の作文が掲載されており、このような読者からの意見を参考に変更したものと考えられる。シリーズ初期には特に、こうした出版事業への不慣れさや、試行錯誤の様子が窺える(菊池知勇『児童文章学』5 (文録社, 1929), pp.79-87, 国立国会図書館デジタルコレクション, <https://dl.ndl.go.jp/pid/1717808>, (参照 2023-10-21).)。
- 15) 第一次世界大戦前の日本の度量衡は、尺貫、メートル、ヤード・ポンド法の三系統の尺度を混用している状況であった。大戦後に工業の発展が重要視される中、その基礎といえる工業規格の統一が急務となり、1921年(大正10)に度量衡法が改正、1924年(大正13)に施行、以降猶予期間は設けつつもメートル法に統一となる。ただし実際にはすぐにメートル法のみが使用されるようになったわけではなかった(小泉袈裟勝『ものと人間の文化史22 ものさし』(法政大学出版局, 1977), pp.253-272.)。
- 16) 清水隆/編『電動機』科学遊具と自作1 (児童科学教育会, 1923), pp.5-7. なお引用文の旧仮名遣いは現代仮名遣いに直して記載している。以下同様。
- 17) 児童科学教育会としての記述であり、中村與資平の関与も考えられるが、この「父兄の方々へ」には執筆者名が明記されておらず、実際に誰が作成した文章かは判然としない。
- 18) 大正自由教育については以下を参考とした。山田恵吾/編著『日本の教育文化史を学ぶ 時代・生活・学校』(ミネルヴァ書房, 2014), pp.122-144. 中野光『大正自由教育の研究』(黎明書房, 1968). 菅忠道『『赤い鳥』の成立と発展』(赤い鳥研究) (小峰書店, 1965), pp.7-19.
- 19) 例えば『おとぎの世界』『金の船』『童話』などを、鈴木三重吉は「赤い鳥のマネ雑誌」としている(鳥越信『『赤い鳥』の周辺雑誌-鈴木三重吉の書簡を中心に-』(赤い鳥研究) (小峰書店, 1965), pp.43-57.)。
- 20) 日本の子ども向け科学読み物の出版ブームについては下記に詳しい。板倉聖宣「科学読物の生い立ち-日本最初の科学読物」『科学の本の読み方すすめ方』(仮説社, 1993), pp.110-174. 鳥越信/編著『はじめて学ぶ日本児童文学史』シリーズ・日本の文学史1 (ミネルヴァ書房, 2001), p.44.
- 21) 1922年(大正11)8月号で廃刊。
- 22) 実際には前述の『理化少年』や科学知識普及会『科学知識』(1921年創刊)などに、科学玩具・工作の記事は少ないながらも多少みられる。なお原田三夫が編集主幹を務めた『科学画報』(1923年)、『子供の科学』(1924年)の創刊は『科学遊具と自作』発行より後になる。
- 23) 第1期タイトルと発行予定は、第1巻『電動機』広告欄など、第2期タイトルは、第16巻『活動寫真機の作り方』の「第二期会員申込案内」を参考にした。なお第2期の発行予定は「第13号より第24号までにして七月より毎月一冊」とあ

- るので、第1期と同様に月に1冊のペースを予定していたらしい。
- 24) 国立科学博物館図書室の所蔵資料により確認した。
 - 25) 東京帝国大学では理科研究所、理化学教室、大学病院外来患者薬局、図書室の四カ所から出火しているが、発火点の建物を消失したのみで外部には延焼しなかった（前掲註8）同書, pp.67-68.）。
 - 26) 同じ西片にある誠之小学校の震災被害は、煉瓦塀の一部が崩れたことと、理科機械器具などの破損のみであった（東京都文京区教育委員会/編『文京区教育史 学制百十年の歩み』（東京都文京区教育委員会, 1983）, p.400.）。
 - 27) 西片の震災被害は、前掲註8）・26）のほか、改造社/編『大正大震災災誌』（改造社, 1924）. を参考にした。
 - 28) 印刷組合百年史刊行委員会/編『東京の印刷組合百年史』（東京都印刷工業組合, 1991）, p.193.
 - 29) 秀英舎は大日本印刷株式会社の前身。1876年（明治9）、佐久間貞一が創業し日本で最初に本格的な活版印刷業を行う。市谷加賀町の第一工場は1886年（明治19）に開設（前掲註28）同書, p.220.）。
 - 30) 大日本印刷株式会社社史編集委員会/編纂, DNP年史センター /編『大日本印刷百三十年史』（大日本印刷, 2007）, p.80.
 - 31) 清水隆『図解新しい科学玩具の作り方』（資文堂書店, 1931）, 国立国会図書館デジタルコレクション, <https://dl.ndl.go.jp/pid/1111594>（参照 2023-10-21）.
 - 32) フェラー（アントン・フェラー）について、中村の「自伝」や「営業経歴」には単にドイツ人と書かれているが、西澤によると、フェラーはチューリヒ・ポリテクニクムでの修学経験のあるオーストリア人だという（西澤泰彦「続・生き続ける建築—9 中村與資平」『INAX REPORT』No.187（INAX, 2011）, p.6.）。
 - 33) フェラーについて、中村は「自伝」の中で、「性格は極めて温良で建築の技術はもとより、油絵を良くし一般の科学に通じ文学に興味を持ち一種の天才的な男」と評している。
 - 34) この章で記述している中村與資平の経歴については、前掲註1）の参考資料のほか、前掲註5）「自伝」、「営業経歴」などを参考にした。
 - 35) 中村與資平『米欧旅行記ノ内亜米利加之巻』『米欧旅行記ノ内欧羅巴之巻』（1931）. 浜松市立中央図書館蔵。
 - 36) 17ヶ国の内訳は、カナダ、アメリカ、メキシコ、フランス、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、チェコスロヴァキア、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、イギリス、ベルギー、オランダ、スイス、イタリア、スペインとなっている。「営業経歴」にも訪問先都市名と行程図の記載がある。
 - 37) 「米欧旅行記」内の飛行機を利用した部分の記述は、第6巻『単葉飛行機』にも抜粋して掲載されている。
 - 38) 中村與資平『米欧旅行記ノ内欧羅巴之巻』（1931）, p.187.
 - 39) 第10巻『印刷機』の挟み込み資料（広告チラシの類）をみると、ほかに賛助員として東京帝国大学教授や大正自由教育に関わりのある教師陣など、多くの著名人の名前が列挙されている。
 - 40) 藤五代策『科学と創作とを主とせる理工玩具の研究』（モナス, 1924）, pp.9-10. 『Spiel und Arbeit』をここでは「遊戯と仕事」と訳しており、そのままの引用としている。なお中村は自伝においては「遊戯と製作」と訳している。
 - 41) Deutsche National Bibliothek での書誌一覧からの調査による。 https://www.dnb.de/DE/Home/home_node.html,（参照2023-10-11）.
 - 42) 「日本へ初耳のカイゼルパノラマが来る 前独帝が数億の金を投じて撮影させる」読売新聞. 1922-06-26, 朝刊, p.5, ヨミダス歴史館, <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>,（参照 2023-10-11）.
 - 43) 「学校で得た知識で玩具を自作させる 児童科学教育会」読売新聞. 1923-01-13, 朝刊, p.4, ヨミダス歴史館, <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>,（参照 2023-10-11）.
 - 44) 「カイザー世界パノラマ」読売新聞. 1923-03-09, 朝刊, p.4, ヨミダス歴史館, <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>,（参照 2023-10-11）.
 - 45) 七字魁/編『発明品博覧会報告』第3回（第三回発明品博覧会, 1924）, 国立国会図書館デジタルコレクション, <https://dl.ndl.go.jp/pid/978464>,（参照 2023-10-22）.
 - 46) 明治後期から大正にかけての博覧会会場には、商品陳列館がよく利用されてきたが、1919年（大正8）の平和記念家庭博覧会の最中に火災で焼失しており、この発明品博覧会ではその後に建てられた産業館を会場としている（杵名貴彦「聖地・上野公園にみる博覧会の「分類」と「遷移」」『万博学』創刊号（思文閣出版, 2022）, pp.149-175.）。
 - 47) 前掲註46）同書, pp.120-121.
 - 48) ベルナル・コマン, 野村正人/訳『パノラマの世紀』（筑摩書房, 1996）, p.76.
 - 49) ヴァルター・ベンヤミン, 小寺昭次郎/編集解説『ベルリンの幼年時代』 ヴァルター・ベンヤミン著作集12（晶文社,

- 1971), pp.13-15.
- 50) 東京博物館/編『動力の利用：能率増進』(科学博物館事業後援会, 1923), p.279, 国立国会図書館デジタルコレクション, <https://dl.ndl.go.jp/pid/979111>, (参照 2023-10-24).
- 51) 「能率増進動力利用展覧会を観る」『教育研究』258 (初等教育研究会, 不味堂出版, 1923・6), pp.90-92.
- 52) 『単葉飛行機』科学遊具と自作6, pp.111-113.
- 53) 「児童の為に科学講演」東京朝日新聞. 1923-07-22, 朝刊, p.9, 朝日新聞クロスサーチ・フォーライブラリー, <https://xsearch.asahi.com/shimen/pdf/?1698660221858>, (参照 2023-10-11).
- 54) 大蔵省印刷局/[編]『官報』1923-04-21, (日本マイクロ写真, 1923), p.617, 国立国会図書館デジタルコレクション, <https://dl.ndl.go.jp/pid/2955338>, (参照 2023-10-24).
- 55) 文部省/編『図書館書籍標準目録』大正13年後期・14年前期分 ([文部省], 1926), 国立国会図書館デジタルコレクション, <https://dl.ndl.go.jp/pid/941591>, (参照 2023-10-24).
- 56) 毎日新聞社/編『毎日常鑑』1926 (毎日新聞社, 1925), p.797, 国立国会図書館デジタルコレクション, <https://dl.ndl.go.jp/pid/2994755>, (参照 2023-10-24).
- 57) 大口で購入して地方の図書館や学校、孤児院等に寄贈している例が複数あり、例えば購入者として徳大寺公弘などの名がある。
- 58) 菅忠道『「赤い鳥」の成立と発展』『赤い鳥研究』(小峰書店, 1965), p.14.
- 59) 『中央公論』38 (13) (429) (中央公論新社, 1923・12), pp.127-128.
- 60) 佐谷有吉/編『小児科及優生学』上巻, 最新家庭医学4 (近代社, 1929), p.40, 国立国会図書館デジタルコレクション, <https://dl.ndl.go.jp/pid/1048695>, (参照 2023-10-24).
- 61) 垂井増太郎「理科と手工科との連絡について」『理科教育』8 (2) (理科教育研究会, 1925・2), pp.43-48, 国立国会図書館デジタルコレクション, <https://dl.ndl.go.jp/pid/1898649>, (参照 2023-10-24).
- 62) 前掲註14) 同書.
- 63) 吉野俊造「父作造と私」『中央公論』93 (3) (1092) (中央公論新社, 1978・3), pp.35-37.
- 64) 成城学園五十周年史編集委員会/編『成城学園五十年』(中央公論事業出版, 1967), pp.313-315.
- 65) 成城小学校での理科指導案の具体例をみると、実験と参考書による研究、工場見学のセットで一つの授業を構成し、最後に生徒にレポートを書かせている。5年相当の学年の学習工程表のうち、選択性の自由研究題目の中には、「モーターの製作」や「電池の造り方」などの項目もみられるが、その具体的な授業内容は確認できていない。(中野光『大正自由教育の研究』(黎明書房, 1968), pp.197-201.)
- 66) 「編集室より」には「当会のこの次の企ては製造化学を面白く平易に解説し、吾々の生活に直接必須なる化学工業品の製造を児童に簡易に理解意得せしめたいと思って居ります」と書かれている。
- 67) 浜松市立中央図書館/編『浜松が生んだ名建築家中村与資平展』(浜松市立中央図書館, 1988), p.27.

【謝辞】 本稿執筆にあたり、浜松市立中央図書館に資料や情報提供のご協力をいただいた。記して謝意を表する。